季刊

直江の津

年間特集

直江津を掘る

5フォッサ・マグナを境にした
東西の日本文化と
南北の国土軸

巻頭エッセイ

わたしの直江津

知の楽しみ

「緑の島」の物語るもの

フリースペース

こんなまちがあった

ミニ特集

50年で変わった港

◉直江津経済文化研究会◉

秋号
9,10,11月

直江の津

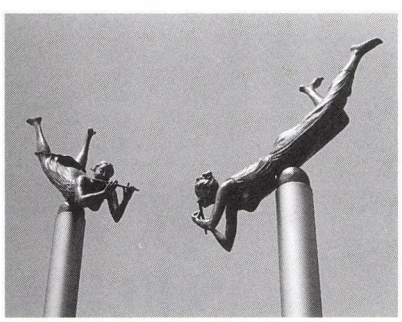
第三号　秋号
二〇〇一―九・十・十一

年間特集

直江津を掘る

5　フォッサ・マグナを境にした東西の日本文化と南北の国土軸　市川健夫……4
巻頭エッセイ　分岐点　吉越泰雄……3
ミニ特集　50年で変わった港……16
知の楽み　「緑の島」の物語るもの　大悟法滋……12
フリースペース　こんなまちがあった　八木登美男……19
講　演　「都市景観」から地域と歴史を考える　浅倉有子……24
読書びと　『画家の妻たち』澤地久枝著……28
見る目　織部柳図徳利……30
東西海陸……27
読者から……29

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治十一年「福永家文書」より



「飛天」（1995年）
岡本錡二作
平和記念公園
元捕虜収容所跡地

分岐点

吉越泰雄

旅は、僕に恋を与えてくれた。

秋田県・男鹿半島の帰り、女性一人を含む四人の旅人は直江津駅で信越線と北陸線に別れた。僕らはだだっ子のように、ずっと旅が続けば良いと真剣に話し合った。

「このまま、乗り換えて、東京へ行けばいい。」

しかし、信越線に乗り換えたのは、僕と友人の二人。階段でつながったホームに、隣りあわせで並んでいる列車。僕らは階段を駆け下り、列車に飛び乗って、車内を走った。どちらかのホームの発車ベルが僕の足を宙に浮かせる。

〝いた！〟……彼女のさびしそうな横顔が隣りの列車で、がたりと僅かに揺れた。ふと、何かを感じたように視線をずらしてこちらを見た。一瞬、目の中に驚きが走る。その顔が横に流れて、長い列車が四角い窓の中で勢いを増した。

秋を越えて、冬も本格的な寒さが四囲を覆う頃、電話が入ってきた。北陸線で帰って行った彼女からであった。直江津で逢おうと言うことになった。夏の直江津とは違ってさみしさが粉雪に舞っていた。迷路のような、地図にないような町並みは残っていたが、夏の干乾びた匂いも賑わいも、どこへこの道は出るのだろうかと言う期待感も消えていた。海岸へ出ると波を運んでいる風がやけに冷たい。

僕は彼女が脇にいるだけでよかった。何も喋らなくとも……。でも、何か苛立ちが僕らを取り巻く。じっと、海を見つめている彼女の小さい肩に声を掛けて見た。

「私、東京へ行くことにした……」

それが、彼女の回答であった。早くこの場から逃げ出したい自分を感じながら、また、逢いたくなるだろうと思っていた。北陸線を見送って、バスに乗った。

その化石となった恋は、三十数年経って直江津駅で偶然が再会を許した。彼女は、やはり寡黙な女性であったが、きらめく視線を僕に投げ掛けてくれた。ほくほく線で上京する僕は野暮な恋ではなかった、と充実感で膨らんで階段に手を振った。

（市内在住）

年間特集「直江津を掘る」その5

フォッサ・マグナを境にした東西の日本文化と南北の国土軸

市川健夫
いちかわたけお



フォッサ・マグナは東西文化の接点

フォッサ・マグナ（大地溝帯）は、糸魚川・静岡構造線と直江津・小田原構造線にはさまれた地溝帯である。それは第三紀中新世（二六〇〇万～六〇〇万年前）から、鮮新世（六〇〇万～三〇〇万年前）まで海であった。そこが三〇〇万年前の隆起運動によって陸化し、筑摩山地などになった。また妙高火山群・八ヶ岳火山群、富士箱根火山群などが噴出して、海溝を埋めていった。このフォッサ・マグナは、地質的に東日本と西日本に区分しているばかりでなく、人文的には東西文化の接点にもなっている。

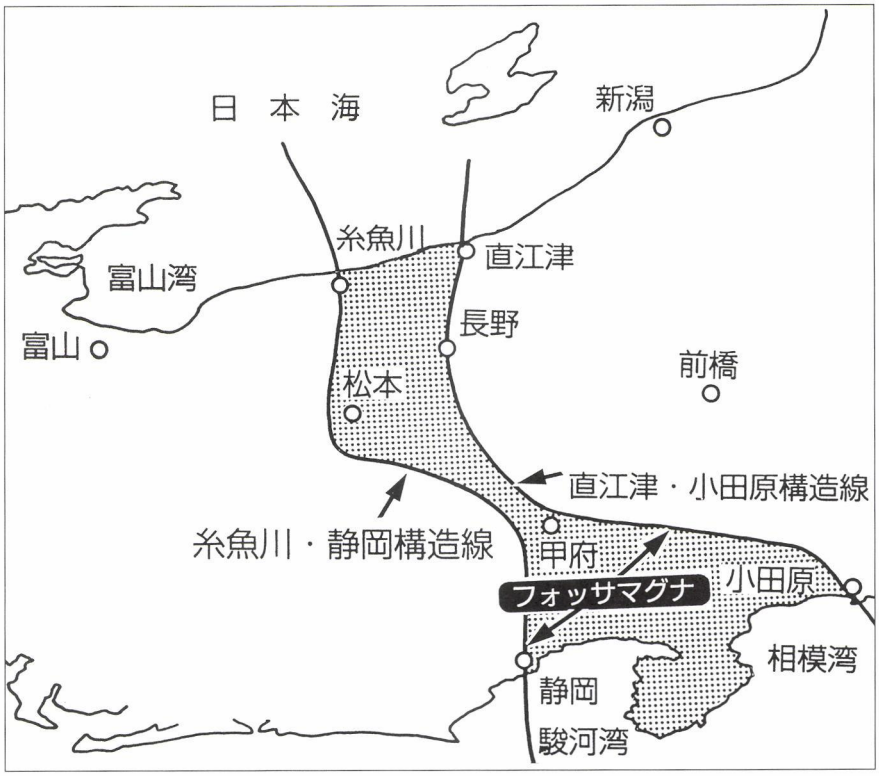
歳取り魚―鮭と鰤

大正月の行事食として歳取り魚は欠かせない。歳取り魚は長崎県のように鯨肉を食べているところもあるが、東日本では鮭、西日本では、鰤が一般的で、その境界がフォッサ・マグナである。高田平野・飯山盆地・長野盆地・上田盆地・佐久盆地・甲府盆地・越後平野・関東平野・東北地方は、鮭文化圏である。高田平野・長野盆地の豪商など経済的に余裕のある家では、鮭と鰤とを併用していたが、それは例外であった。一方糸魚川平野・松本盆地・諏訪盆地・伊那盆地・木曽谷・北陸三県・飛騨・美濃・関西地方は、鰤文化圏である。なお上方文化の影響の強い佐渡は、両津湾で寒鰤（かんぶり）がとれることもあって、鰤文化圏の飛地になっている。

長床犁と短床犁

牛馬に曳かせる犁（すき）（からすき）は、農業生産力の高さを規定する最も重要な生産手段であった。日本の犁は東日本の長床犁と西日本の短床犁（朝鮮型で抱持立て犁（かかえもったて）ともいう）に大別されていた。長野県の東北信、新潟県の

上越地方から以東は長床犁が使われていた。また長野県の中南信以西は短床犁圏であった。長野県小県郡出身の県農会技手であった松山原造は、明治三三年（一九〇〇）に両者の長所をとり入れた双用犁（松山犁といった）を発明した。この犁は操作が簡単で深耕できた。そのうえレンゲの根を切りとることが容易にできたので、松山犁の利用は水田裏作にレンゲ栽培を普及させた。二〇世紀初めの農業革命に松山犁の果たした役割は大きかった。いずれにしても松山原造が二つの犁文化圏の接点に生活していたので、このような発明ができたのである。



フォッサ・マグナとはラテン語で「大きな溝」という意味。1500万年前ごろ大陸から離れた“日本列島”になる部分が、大きく沈降して海になり、そこに泥や砂、火山灰で埋まったものが隆起して筑摩山地となり、富士火山帯に属する火山が噴出している。長野市附近での第三紀層の厚さが5000mもあるといわれている（編集部）。

赤梨と青梨

わが国で栽培されている梨は和梨が主体で、洋梨（西洋梨）はあまり作られていない。和梨は関東地方や越後平野では、長十郎に代表される赤梨が主力である。これは東京市場では赤梨が好まれているからである。これに対しても鳥取県など西日本では、二十世紀梨など青梨が主である。中南信の伊那盆地では二十世紀が主として作られ、関西市場に出荷されている。

桂と桧

東北地方で桧といわれている樹は、アスナロ（明日桧）であって、桧の天然木は自生していない。また北関東では近代になって桧が植えられたが、桧の天然林はない。したがって日光の東照宮は主として欅材で造られている。宝暦四年（一七〇七）に再建された善光寺本堂は、南佐久産の桂材を主として用いている。東北信には桧の天然林がないからであった。

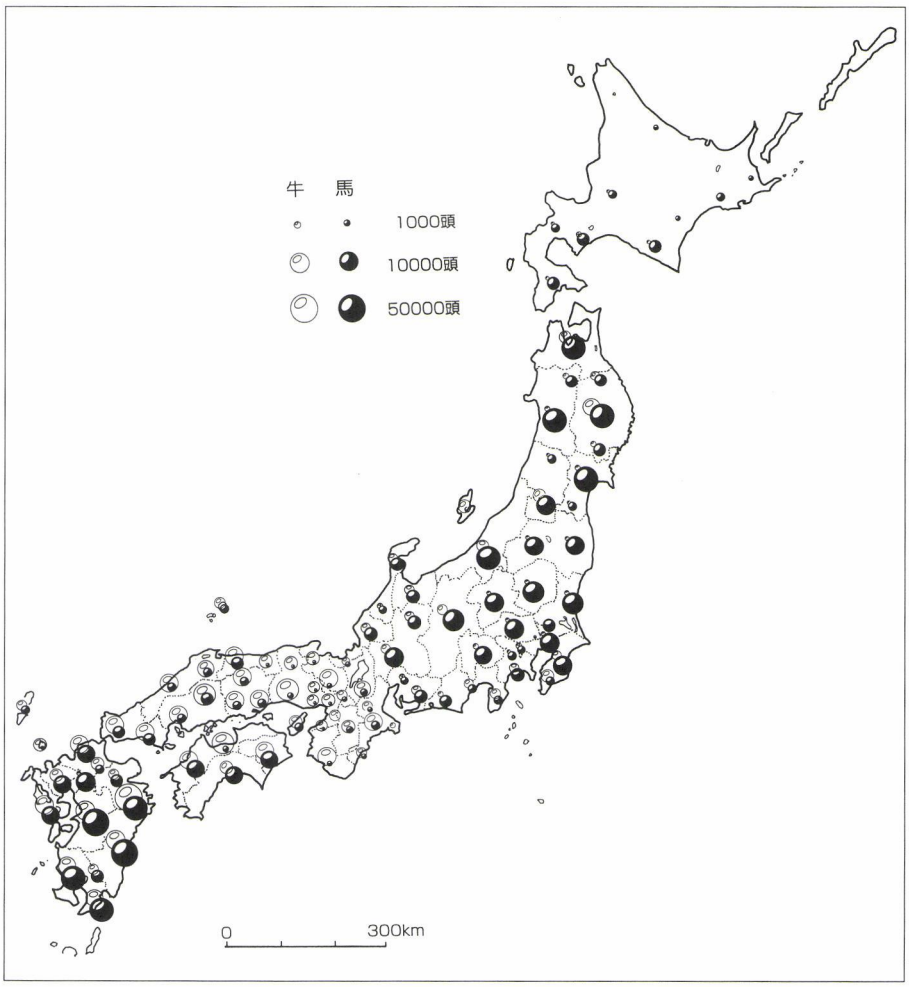
北アルプス・木曽地方・南アルプスから以西の西日本では、桧の天然林が自生し、またその人工林が近世から造られてきた。桧は寺院・神社・宮殿の建築材、また木彫の素材として最高であった。

根深葱と葉葱

「深谷葱」に代表されるように、関東の葱は根深葱である。高田平野・富山平野・東北信なども根深葱圏である。一方西日本では大分県・鳥取県では根深葱の飛地で、ここで生産された葱は、京阪神に出荷されて、「東京葱」の名で売られている。関西で一般的に作られているネギは葉葱（細葱）である。信州では下伊那や木曽など西部で栽培されているが、年々栽培が北上している。また神奈川県の小田原盆地は、葉葱の飛地になっている。

切り餅と丸餅

東日本の切り餅（菱餅）文化圏と西日本の



明治19年における国別牛馬飼育頭数
「第三次農商務省統計表」により作成（市川原図）
日本における牛と馬の文化圏は、敦賀湾と伊勢湾を結ぶ線で東西にはっきり区分されていた。

丸餅文化圏は、三関（愛発関・不破関・鈴鹿関）を結ぶ線によって分たれる。しかし、上方の影響の強い福井県の嶺北地方と石川県は、丸餅文化圏に入る。また富山県は丸餅と切り餅の漸移地帯で、正月五日まで丸餅、六日以降切り餅という地域もある。さらに佐渡と庄内平野は丸餅文化圏の飛地になっている。

なお丸餅文化圏でも、種子島・屋久島と南西諸島では、東南アジアと同じく黒糖入りの丸餅がつくられている。丸餅がより高温多湿な土地にみられるのは、切り餅より黴にくいからである。

沢と谷の地名と牛馬文化圏

日本の地形地名で東西で表現の異なるものに沢と谷がある。その境界線が糸魚川・桑名（三重県）線だとされている（鏡味完治）。関東では一の沢、二の沢と呼ぶのに対し、関西では一の谷、二の谷と呼んでいる。しかし糸魚川市の根知谷のように、糸魚川・桑名線の東にもあるが、それは例外である。

古代から近世に至る大家畜飼育の文化圏をみると、敦賀湾と伊勢湾を結ぶ線から東が馬文化圏であり、西が牛文化圏、さらに九州など西南日本は牛馬混在圏になっていた。東日本でも佐渡・丹那（静岡県）・南部地方（岩手県・秋田県鹿角地方）には、牛文化圏があった。

餅と沢・谷地名、牛馬文化圏の境界などは、フォッサ・マグナではなく、若干西にずれているが、東西文化の接点は中部地方であることに変わりがない。



雪国の風土と地域文化

日本列島で最も幅が広いのが、中部地方である。南北に四〇〇キロ近くにわたり分布している。日本の八大地方の多くは二地域に区分されているが、中部地方のみは北陸地方・中央高地・東海地方と三分されている。北陸地方は世界有数の深雪地帯、中央高地は寡雨気候で気温の年較差・日較差の大きい内陸性気候、また東海地方は夏に降水が多い照葉樹林帯であり、その風土は大きく異なっている。

北陸地方の中でも最も降雪量が多いのは上越地方である。積雪量をみると生活空間における最高積雪量は、板倉町柄山で八一八センチ（一九二七年二月一三日）、上越市高田で三七七センチ（一九四五年二月二六日）を記録している。これはカリフォルニアの山地に次ぐ世界的な積雪量である。

多雪の要因としては、西高東低の冬の気圧



実りの秋を迎える上越地方の棚田

配置のもとで、吹き出す北西季節風があげられる。寒冷で乾燥したシベリア気団は、四〇〇〇メートルの上空で氷点下三〇度以下になる。一方本州の日本海沿岸をみると、北上する青潮（対馬海流）は、新潟沖で真冬でも一〇度と暖かい。この青潮から寒気団がたっぷりと水分を吸収した後、季節風は妙高火山群・東頸城丘陵、越後山脈などの脊梁山脈で強制上昇させられて、地形性降雨をもたらす。これが「山雪」で、その降雪量は一昼夜で一メートルを越すことも珍しいことではない。日本海から内陸に向かって、「一里一尺・一坂五寸」という気象俚言がある。また長野県では信越国境に向かって「一里一尺」といっているが、いずれも山雪の積雪量を意味している。また上越の平野部に北陸前線が停滞して、前線性降雨をもたらす。これが「里雪」である。

北陸の対岸、沿海州のウラジオストックの最高積雪量は四七センチで、あまり雪は降らない。ヴィルム氷期に北陸地方の積雪量は一メートル以下であったが、八〇〇〇年前の縄文早期から日本海に青潮が流入して、北陸地方に降雪を多くもたらすようになった。縄文後期・晩期（四〇〇〇～二三〇〇年前）は小氷期のため、積雪量が少なくなり、越後でもイノシシやシカが生息するようになった。

積雪は豊かなブナやミズナラの森と相まって、水資源を涵養した。新潟県をはじめ、北陸地方は「積雪水田単作地帯」といわれてきたが、積雪の融水は潅漑用水になって、広大な水田を潤している。しかし積雪によって水田裏作を行う地域は少なく、水稲の単作地帯になっていた。天照大神が「豊葦原瑞穂国」といっているのは、アシの自生する沖積平野が開田されて稲作が営まれている国を意味している。日本最大の沖積平野であった越後平野やこれより小規模だが高田平野の本格的な開発は、近世になってから始まった。潟湖の干拓など豪農の請負による新田開発によって、沖積平野は一面水田になった。また東頸城丘陵など第三紀山地では、融雪水を用い天水田が造成された。その結果、山地の傾斜面は棚田となり、ここからも大量の米が生産された。

米の生産は粟・黍・稗・蕎麦などの穀物より生産力が高いために、稲作が発展していた北陸地方は、近代的な工業化が進む二〇世紀初めの産業革命期まで、日本列島のなかで最も人口が稠密な先進地域であった。北前船という沿岸海上交通が盛んであった北陸をはじめ日本海側は「表日本」であった。明治五年（一八七二）新潟県の人口は一四七万人で全国府県中最多であり、また人口密度は石川県が一平方キロ当たり一五二人、富山県が一四五人で、全国的にみて最も高かった。人口密度の高いことは浄土真宗の信仰が盛んで、人口増加を抑制しなかったこともあったが、主要因としては稲作の生産性が高かったことがあげられる。太平洋側に「四大工業地帯」が発展する過程で、「裏日本」との間に地域格差が生まれた。しかし産業革命前までは、日本海側の方が生産力が高かったのである。

深雪地帯である北陸地方では、大量の降雪・積雪という自然条件に巧みに対応してきた。あるいは合理的に適応した地域文化が形成されてきた。民家では雪に強い構造をもっ

た寄棟の茅葺き屋根が基本であった。また津軽平野から信越国境までの深雪地帯では、積雪期の出入りに便利な中門造の民家が多くみられる。また経済的に余裕のある豪農の家は屋根の下に梁を出して軒先の重い積雪を支える船枻造になっている。市街地では歩行者が積雪期でも行動できるように、雁木が設けられている。雁木は青森県から鳥取県までの日本海側に分布しているが、一番卓越しているのは新潟県である。

海岸地域は風雪が強いので、切妻の板葺き石置き屋根の民家が多かったが、現代ではトタン葺きか、黒瓦（能登瓦）や赤瓦（石州瓦）など、釉薬を塗った瓦葺きに変わっている。

食文化では隈笹の葉で巻いた保存食がよく造られている。粽・笹餅・笹巻・笹寿司（押し寿司）など、その種類も多彩である。深雪地帯では小麦の栽培が難しいので、蕎麦切りの繋ぎにモリアザミ科のオヤマボクチの葉の繊維や布海苔を用いて打っている。また日本海沿岸ではエゴ海苔を煮て融かし、トコロ天のようにして食べる料理が行事食として出される。粽やエゴ海苔料理は、信越国境に近い長野県北部へ越後から伝えられている。

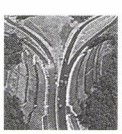
雪が解ける際、水素イオンを発生し、植物性繊維を漂白する。この雪晒しの原理を応用した伝統的工芸品産業が、日本海側の各地に発達している。特に苧麻（カラムシ）で織った越後上布・小千谷縮をはじめ、楮の皮繊維を用いた和紙、また桐下駄の製造に当たって、化学薬品ではなく、雪晒しによって漂白することが行われている。

利雪は農業・上水道用水、水力発電、橇による木材の輸送、氷雪による食品貯蔵などがあり、きわめて多様である。シベリアのツングース系民族の雪上歩行具である古代スキーは、中世東北地方に伝えられた。津軽の戦国大名であった津軽為信は「穿き橇」といわれた雪上歩行具を武士たちに履かせて、敵を打ち破った。秋田県でも古代スキーが広く用いられており、角館町立民俗資料館には、穿き橇が多数所蔵されている。

明治四四年（一九一一）高田第十三師団がオーストリアの陸軍少佐テオドール・フォン・レルヒ少佐を招待して、スキー講習会を開催したのが、近代スキーの始まりであった。翌四五年高田師団は近隣の中等学校の教師や民間人を対象にスキー講習会を開いた。この時参加した長野県立飯山中学校の教師が、同校生徒にスキー術（雪艇術）を教えた。ここで学んだ寄宿舎の生徒たちは、野沢温泉・志賀高原・草津温泉・白骨温泉などの故郷に帰って、スキー術を伝えた。近代スキーは高田から全国各地に伝播されることになったのである。



金谷山における女学生のスキー競技（大正初期）



信越地方の交流

信州和田峠原産の黒曜石が、越後はもとより佐渡や能登半島からも出土している。また姫川水系の小滝川渓谷産の翡翠が信州の各地から発掘されていることから、信越地方の交流は縄文時代から盛んであった。

『古事記』に出てくる大国主命が越ノ国の奴奈川姫に対する妻問いする神話、お二人の間

に生まれた建御名方命にまつわる物語をみても、越ノ国と科野国はきわめて密接な関係があった。

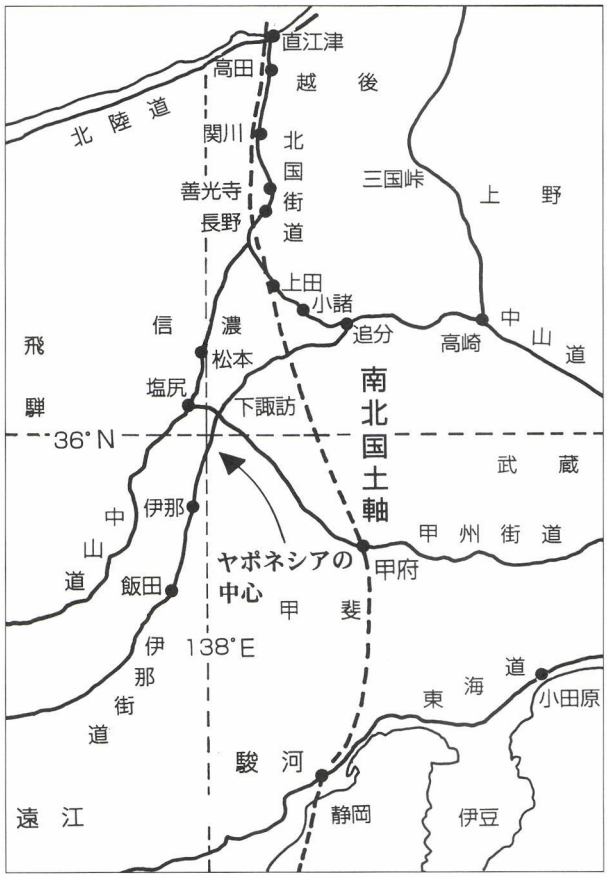
七世紀に開設された東山道の支道は、錦織（長野県四賀村）で本道と別れて、麻積・田子・沼辺などの駅を通り、五智（現上越市直江津）で北陸道に合していた。これより古い古東山道支道は白鳥（長野県栄村）から深坂峠を越え、柏崎で北陸道に合していた。

近世北国街道は信濃追分（軽井沢町）で中山道から分岐し、上田・善光寺町・高田・今町（直江津）・柏崎・出雲崎に至っていた。このルートは日本海側の諸大名が参勤交替に用いた道であり、佐渡金山奉行も使った。また信濃追分節が北陸地方、東北地方の日本海側、北海道の松前に伝播された道でもあった。

近代に入ると交通の主役は鉄道になるが、明治二一年（一八八八）中山道鉄道の資材運搬線としての直江津線（後の信越本線）は、直江津と長野・軽井沢間が開通し、明治二六年（一八九三）さらに高崎まで全通して、当時信越本線は日本海側と太平洋側を結ぶ日本で唯一の横断鉄道になった。信越地方と首都東京が鉄道交通によって密接に結ばれたばかりか、上越地方と北信地方との交流がより盛んになった。なお直江津の築港に当たり、長野県が新潟県以上に財政支出をするなど、両者の協力関係は深まった。

平成九年（一九九七）上信越道が全通し、上越と北信との交流はさらに深まっている。東北信と木曽を除く中信地方では、海というと上越の海岸を指している。また中越の魚沼地方と北信との交流も深い。上越・中越地方は、古くから漬物では野沢菜文化圏であり、奥信濃とは風土の上で等質である。

上越地方は鉄道開通前には北信を経由して、北上州の草津温泉、六合村などとの交流があった。上越産の塩・干魚が移出され、逆に北上州から硫黄・湯花・下駄・箸・曲物などが移入されていた。このように直江津・高田と信州や北関東内陸部の交易はかなり広域にわたっていた。



近世の街道ネットワーク・南北国土軸・ヤポネシアの中心（編集部）



南北の国土軸の必要性

日本政府が設定した国土軸についてみると、東西軸が主で国土の開発が進められてきた。二〇世紀初頭、日本は産業革命期を迎える。明治三四年（一九〇一）官営の八幡製鉄所が稼動し始めるが、これを契機に、京浜・中京・阪神・北九州の四大工業地帯が、第一次世界大戦中、戦後にかけて形成される。

第二次世界大戦後、一九六〇年代の経済の高度成長を通じて、南関東から東海地方・近畿中央部にかけて、連続した都市地域ができた。アメリカでは東部のボストンからフィラデルフィアにかけてのコナベーション（連続都市）をメガロポリス（巨帯都市）と呼んでいるが、日本では東京と神戸を結ぶ連続都市地域を「東海道メガロポリス」といっている。さらに瀬戸内地方・北九州を加えた地域を、「太平洋ベルト地帯」とマスコミは名づけている。東海道メガロポリス、もしくは太平洋ベルトに、わが国の三分の二に近い人口と都市機能が集中し、また工業の多くが集積している。

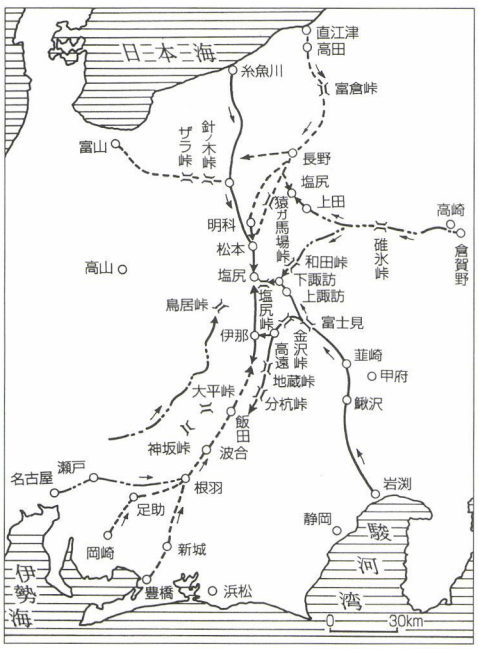
東海道メガロポリス・太平洋ベルトといっ

コラム *columu*

～越後から信州への塩の移入路～



謙信が贈った塩を運んだといわれる牛の「牛つなぎ石」（松本市）



日本海側から信州へ移入された塩を北塩といった。直江津からの塩は主として北信地方に出荷されたが、関東地方から東信地方に送られた南塩との接点が、塩尻（現在上田市域）であった。また糸魚川から松本地方に塩が送られたが、東海地方からの移入塩との接点が塩尻市であった。なお長野県栄村に塩尻という集落がある。これは直江津と新潟から入った塩の終点であったことを示している。

海岸は一般に国有地であるが、上越の海岸では谷浜をはじめ所々に私有地が存在している。これはかつて揚げ浜式塩田があったことを示している。明治中期塩の専売制が施行されるまで、上越海岸では製塩が盛んであった。ここで生産された地塩と瀬戸内の十州塩がブレンドされて、信州へ送られていた。

なお糸魚川を除いて越後の塩は俵ではなく、八貫目入りの叺に入れ、牛馬の背に積んで輸送した。一人の牛方もしくは馬方が、最高七頭の牛、あるいは最高四頭の馬をひいた。塩の需要期である秋は時雨（しぐれ）の季節であり、俵では雨水を吸いやすいので、叺をもっぱら用いたのである。

右の図は鉄道開通前における越後から信州への塩の移入路（田中啓爾原図）



昭和２年（1927）長野県小布施町生まれ
東京学芸大学名誉教授・長野県立歴史館館長。理学博士。日本のブナ帯文化・青潮文化の提唱と研究。著書に『日本のサケ－その漁と文化誌』・『雪国文化誌』『森と木のある生活』・『日本の馬と牛』など多数

た東西軸を基本とした開発を追認しているだけでは、政府のいう「国土の均衡した発展」をめざす開発計画を推進することはできない。政府は北海道・東北と東京を結ぶ南北軸の設定を考えているが、日本列島のなかで最も幅の広い中部地方において、北陸地方・中央高地・東海地方を結ぶ南北軸を設ける必要がある。ヤポネシアの地理的中心は、アメリカのランドマクナリー社の世界地図帳によると、北緯三六度線と東経一三八度線の交点とされている。これは長野県岡谷市の西、辰野町の北に存在している。

南北軸の起点は上越市（高田は北緯三七度六分、東経一三八度一五分）で、これから長野・甲府・静岡を結ぶ線に引くべきであろう。上信越道と中部横断自動車道は、この南北軸に沿ったルートになっている。

注　ヤポネシア　北緯三〇度以南の奄美諸島・沖縄諸島はリュウキュウネシア（琉球諸島）であり、大隅国に属する種子島・屋久島以北の九州、四国、本州、北海道の渡島半島南部が和人が住むヤポネシア（日本諸島）ということで、日本のポリティカル・ユニットを算出している。

※本稿は二〇〇一年六月二日、上越教育大学における公開講演会の要旨をまとめたものである。
※写真は全て編集部による。

上越TMO
「なおえつ茶屋」
8月1日オープン







直江津駅前通りにオープンした「なおえつ茶屋」。うるし塗りの大黒柱をそのまま見せたり、展示の棚やカウンターに間伐材を利用するなど工夫が凝らされている。カウンターにいるのは店長の丸山さん

上越ＴＭＯ計画の一環として、直江津地区の活性化事業〝なおえつ茶屋〟がオープンした。

予想したよりスマートなできばえで好感が持てるものになっている。

茶屋では、直江津地域の物産の紹介・販売や飲食の提供、食事・宿泊の紹介などを行ういわば直江津の活性化の情報発信基地としての役割を果たそうというものである。

ＴＭＯ委員会で、各地の調査や検討がなされる中で紆余曲折があったようだが、ようやくオープンにこぎつけた。今後はこのために起ちあげた〝直江津まちづくり協議会〟（板垣仟尋会長）と共同で運営していくことになる。

いうまでもないことだが、〝なおえつ茶屋〟がオープンしたからといって直江津が活性化されるわけではないだろう。この店を核にして、商店やまちの人達へ直江津の再発見とまち活性化への情報を発信しなければならないと思う。つまり、外へ向かっての発信よりも、自分自身への問いかけの場でなければ意味をなさないといえる。

いうなれば、自分の住むまちの良さを発見できるような情報を提供してほしいものである。

まちを見直すことがきっかけになって、何かを起こすことが、まちに活気を蘇らせるのではないだろうか。

ＴＭＯ　タウンマネージメントオーガナイゼイション。平成10年に施行された「中心市街地活性化法」に基づき行われる組織。上越市では上越商工会議所が「上越ＴＭＯ」を運営する。

「緑の島」の物語るもの

大悟法　滋　だいごぼうしげる

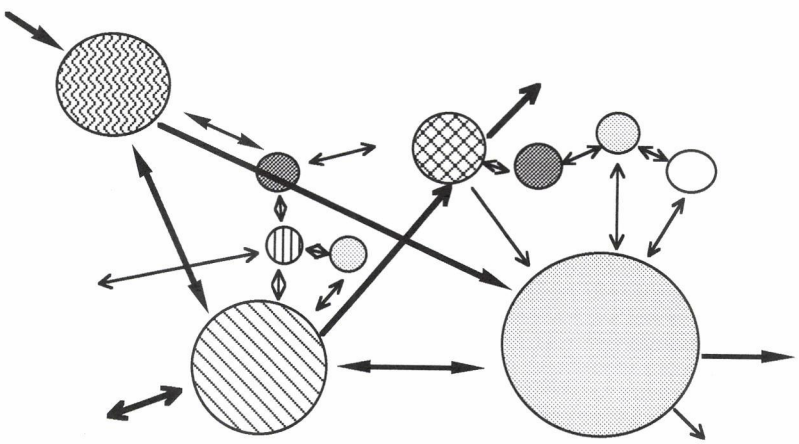


春日山山頂から見える緑の島々

人と自然の共存の証

春日山山頂から上越市の平野部を眺めると、直江津の港から関川に沿うように市街地が続いています。その周りには水田が広がり、その外側を山が取り囲んでいます。こんな風景のなかに、大小様々な森や林が、街の中や、水田の間に、黒っぽい緑の塊のようなって見えます。

このような、点在、あるいは細く長く線状に連なって見える森や林は、「緑の島」とよばれ、単なる風景の彩りだけでなく、その土地の自然と人の暮らしについて、様々なことを教えてくれます。川の近くの大きな森や林は、その付近が小高くなっていて、川の氾濫による被害を受けない場所であることを示しています。したがって、古くからの集落があり、地名にも「島」などの文字が見られる所が少なくありません。また、こうした集落を結ぶように、街道ができます。街道に沿って屋敷林や社寺林などが点々とつながると、遠くからは緑の島が線状に連なって見えます。このような昔から利用されてきた土地は、地盤もしっかりとしており、川の近くでも洪水などの心配もなく、おいしいのみ水が得られる場所でもあります。「緑の島」は、おおげさにいえば、砂漠の中のオアシスのようなものです。そこは人や動物が生活しやすい場所であり、「島」の存在は、人と自然の共存の証とも言えます。



「緑の島」を移動する動物のイメージ

動物の集う所

「緑の島」は、鳥、昆虫などの動物の生息や移動に大きくかかわっています。鳥は自由に空を飛べるといっても、休み無く飛び続けられるわけではありません。「緑の島」は小鳥達のえさ場や休憩所として大切な場所となります。昆虫も渡りをするチョウなどはいても、多くはそれほど長い距離を移動することができません。ウサギ、タヌキ、キツネ、イタチなども山から平野へと連続する「緑の島」を渡って移動します。鳥やけものの移動に伴って種子が運ばれ、昆虫の訪れによって花の受粉が行われます。それが、森や林の環境を豊かにし、また新しい動物の訪れを誘います。「緑の島」の間隔が遠くなると、移動には様々な障害が増えてきます。道路もその障害物の一つです。車に轢かれたタヌキの親子を見たことがあります。上越教育大学山屋敷キャンパス内の林は、比較的山に近い「緑の島」のひとつです。近くの山から、ムササビが飛んできて姿を見せることがあります。タヌキやイタチも生息しています。昭和の終わり頃まではウサギがよく見られましたが、十年以上少雪がつづき、また除雪がよくなったことで、道路を横切ってくることが難しくなったのか、最近は全く姿を見かけなくなりました。近年、道路の下に動物のためのトンネルを造ったり、道路脇の排水路に小動物が落ちても脱出できるような配慮もなされるようになりましが、



旧街道沿いに連なる緑

どのくらいの動物達が利用しているのかはわかりません。「緑の島」は平野部における多様な動物の集う所なのです。

多様な生物の生存

川があると、河畔林が細長く連なります。あたらしく改修された堤防には、森や林がありませんし、関川水系では上流部に行かなければ河畔林らしい林は見られません。所々にヤナギやニセアカシアなどの木々が見られるところがありますが、そんなところでも条件が合えば、鳥やけものなどが訪れます。姫川の河口近くの川岸に小さなブッシュ状の林がありますが、そこにはたびたびカモシカが訪れています。

小さな池や沼のあるところはふつう周囲に森や林があります。森や林の土の中を通った水が、ゆっくりとしみ出て集められ、川になり、窪地に溜まって池や沼になります。上越地域では「緑の島」に隣接した溜め池がそこここに見られます。池や沼があると、水鳥が飛来します。トンボや様々な水生昆虫もやってきます。水があると、湿地や水中に生育する植物が繁茂します。植物が変ればそこに訪れる昆虫の種類も変わってきます。植物環境が多様になれば、多様な昆虫が生息し、その昆虫をえさとする多様な鳥も飛来することになります。

同じように見える「緑の島」も、大きさ、構成樹種など様々であり、島と島の間の距離、

途中の障害物などでも、動物の生息状況は違ってきます。コンクリートで固められた様な所でなければ、水辺は、植物をはじめ多様な生物の生存の可能性を大きくします。水辺も、「緑の島」と一体のものとして大切にする必要があります。多様な生物の生存する場所が確保されることが、人と自然の共存の第一歩になるからなのです。

街の中の「緑の島」

市街地の中にも「緑の島」があります。その多くは屋敷林か社寺林、植林地の一部が残されたもののようです。都市化が進むにつれこれらの森や林は減少しつつあります。

ふつう都会の中の「緑の島」としては、公園が大きなウエイトをしめます。しかし、上越市の市街地周辺には、高田公園、五智公園を除くと大きな公園がほとんどありません。市街地の中にある公園はどれも小さなものばかりで、とくに、新興住宅地の中には単なる小さな荒れ地だけの公園がいくつもあります。そんな名前だけの公園の片隅に、緑化運動で植えられた木が一本、植えた木より太い支柱で支えられ、記念植樹の大きな看板だけが目立っているのを見かけることがあります。形式だけの緑化運動ではなく、本当の緑化を考えなければなりません。

最近、上越市では都市部の公園管理の一部を住民に任せるようになり、それぞれの目的に合わせた公園づくりがはじめられています。そのいくつの公園が「緑の島」になっていくことが期待されます。また緑の線として街路樹の検討が進められ、新しい道路を中心に街路樹の整備が進められています。本来、「緑の島」は、長い歴史の中で、人が自然と共存してきたその名残りの跡といえるものです。しかし、変りゆく時代の中で、残された「緑の島」を守ることと同時に、新しく開発された土地に、新しい「緑の島」を築くことも、人と自然の共存の証かもしれません。

「緑の島」を守る

上越市の市街地周辺の「緑の島」は、ここ十数年の間に、著しい減少を示しています。上越市周辺の航空写真を見る機会があったら、十年以上前の写真と最近のものを見比べてみてほしいと思います。その違いが良く分るはずです。それは都市開発や道路整備が急速に進んだことによるもので、街の発展のためには仕方のないことなのかもしれません。屋敷林や社寺林などの維持管理も大変な労力、時間、お金がかかります。しかし、一度失われた「緑の島」は、そう簡単に再現できません。

市内には、「雅子様の森」と名付けられた、比較的大きな公園があります。ご成婚を記念して市民が木を植えて森を作ろうという計画ではじめられたのですが、残念ながら広場を数列の木々で取り囲んだ状態で、しかもその狭く長い林の中に細い道があり、落葉などもきれいに掃き清められ土は堅く乾いたままで、木々は風雪にさらされ、とても森とは呼べる状態ではありません。森や林は維持だけでも大変なことですし、まして新しく作るためには長い年月と多くの困難を伴うものです。当時はそれなりの事情があったのだと思ってはいますが、市の周辺部の森を記念に整備したほうがと考えると残念な気がします。

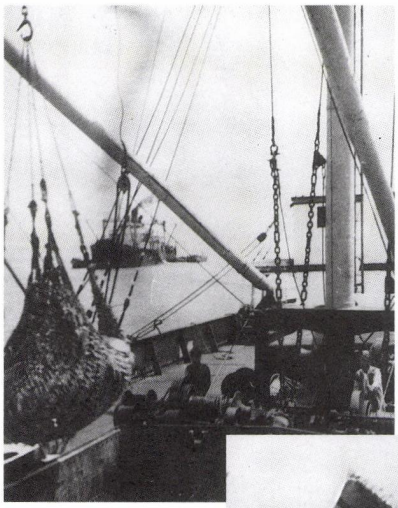
上越市には、まだたくさんの「緑の島」が見られます。しかし、山から平野部へと点々と連続していた島々は、その減少とともに島から島への距離が遠くなり、大きな道路などによってあちこちで分断されています。何とか「緑の島」を守り、育てていかなければなりません。その行動が、人と自然との共存の証になるのです。



昭和16年8月23日生（東京都出身）
学歴：昭和46年3月東京教育大学　大学院理学研究科博士課程植物学専攻修了／理学博士
職歴：昭和62年4月上越教育大学教授（自然系理科）／11年4月上越教育大学自然系教育研究部部長、評議員／13年4月上越教育大学学習臨床講座（総合学習分野）へ移籍　上越教育大学附属幼稚園園長、運営評議員（併任）

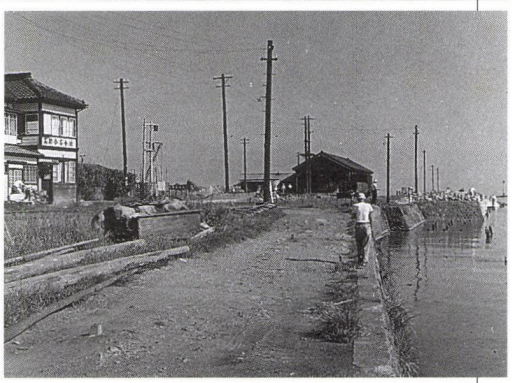
ミニ特集

変わった港









昭和 26 年(1951)7 月、大阪商船・武蔵丸が初の1000 t 級船舶として関川河口に入港。9月22日、国重要港湾の指定を受けるが、港の機能は沖荷役と女子衆の人力、そして関川左岸の浜線が中心であった。しかし、昭和35年の河口分離などの一大事業を経て、直江津港は想像をはるかに超える変貌を遂げた。



旧ドック前方の通称イタリア半島の向こう側に港が拡がることになる（昭和 35 年の河口分離直後の頃）

50年で



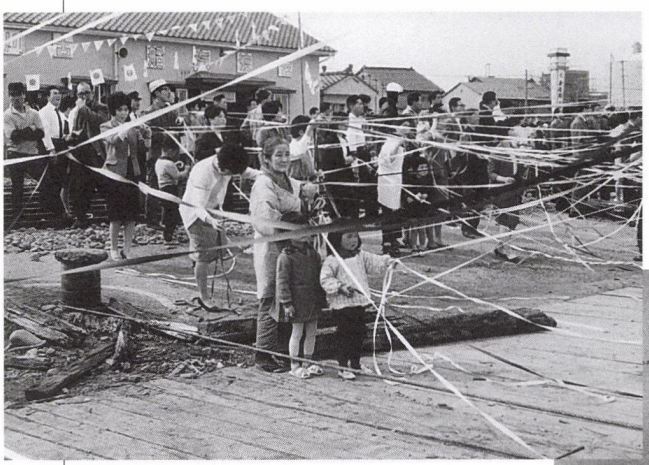


佐渡汽船のターミナル周辺の整備が行われる。右の写真には水天宮の鳥居が見える



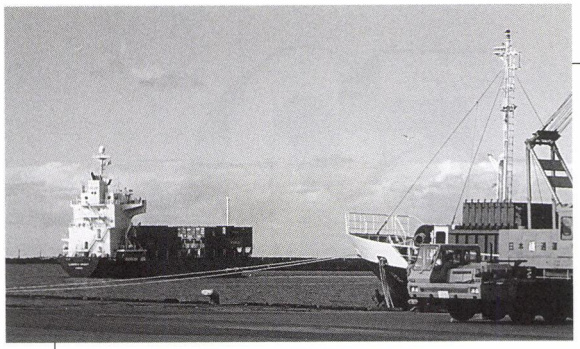
ようやく西埠頭が完成し、昭和38年に1万t級船舶が初めて接岸した







昭和28年頃まで見られたこのようなのどかな風景も、港が整備されるなかで消えていった





左上・右　荷役が従来の３倍のスピードというガントリー（やぐらの意味）クレーンと息つく間も無く釜山へ向け出港していくコンテナ船。
下　出港を待つ九州フェリーと入港する北海道フェリー(春日山山頂より)。円内は札幌ナンバーの競走馬輸送車と久留米ナンバーの野菜のコンテナー車。

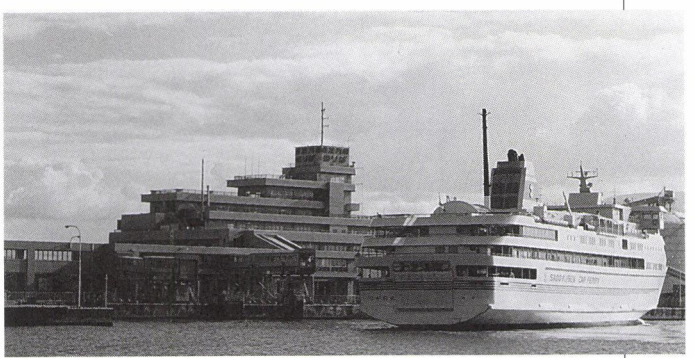






昭和26年９月22日	重要港湾に指定
昭和35年	関川との河口分離完成
昭和52年４月	日本海側で新潟東港に次いで２番目の５万トン級岸壁完成
昭和63年６月	南埠頭旅客ターミナルビル完成
平成元年４月29日	佐渡航路にジェットフォイル就航
平成２年７月19日	北海道への定期フェリー就航
平成７年10月30日	釜山定期コンテナ航路開設
平成８年４月10日	九州への定期フェリー就航
平成８年12月31日	直江津港年間貨物取扱量が1,000万トンを達成
平成10年３月17日	直江津港港湾計画の実施に伴い港湾区域を変更
平成10年11月10日	丹東・大連定期コンテナ航路開設
平成11年３月17日	直江津港荒浜埠頭の公有水面埋立免許を取得
平成11年10月１日	ガントリークレーン共用開始

資料：上越市河川港湾課



上　夕日をあびて佐渡から帰るカーフェリーとターミナルビル。
左　船がいない間は、釣場と化す埠頭。



フリースペース・

こんなまちがあった

『百歳バチャとそのふるさと――直江津町古城の思い出』

本稿は『百歳バチャとそのふるさと――直江津町古城の思い出』～甥や姪のみなさん～と題して、八木登美男氏が母親ハルさんの百歳の賀寿を記念し、ふるさと古城地区を中心とする直江津のことやまちの風物を記録して一冊にまとめたものを了解を得て抜萃したものである。イラストもすべて筆者が描かれた。八木ハルさんは一九〇一年（明治34）に生まれ二〇〇一年（平成13）一月に百歳を迎えられ、文字どおり20世紀を生きた人である。

八木登美男　やぎとみお

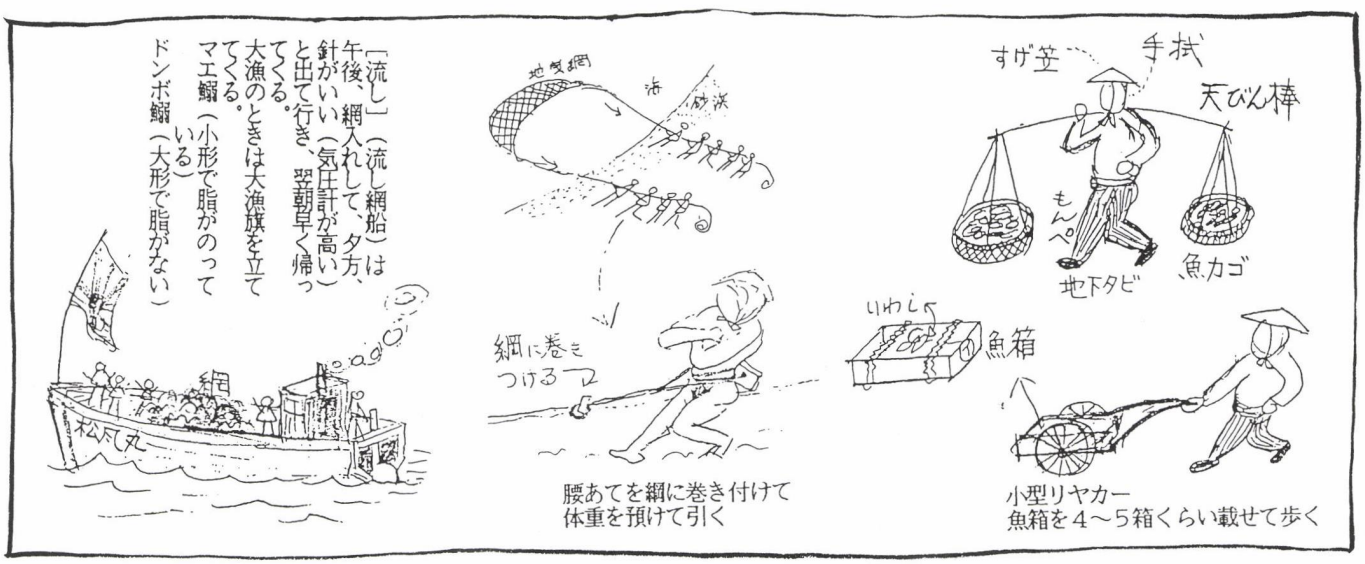
バチャの仕事

天秤棒かついで「地引網」漁の魚売り

高崎の浜（荒川を挟んで東側を高崎の浜、西側を直江津の浜と呼んでいた）では地引き網が行われていた。地引き網というのは、小舟に網を積んで沖合に出て丸く仕掛けて来る。浜ではその網の両端の綱を引いて浜辺に手繰り寄せる漁法であるが、春は小鰯、夏はキスに小鯵、小鯛、コノシロ、太刀魚に渡り蟹、秋はカマスといった具合で小魚が沢山あがった。

バチャは自力で稼ぐ道として地引網漁の行商を選んだ（注・ハルさんは三一歳で未亡人となった）。これは自分の足で稼げる商売であり、稼いだ分は即、日銭として入るので張り合いがあったからかも知れない。「魚売りの行商」というのは、その魚を籠で買い、天秤棒で担いで町に売りに行くという行商である。小魚は杠（チギ）秤で計って売っていたようだ。杠は「信用の基」といって、鱗をとっていつも磨いていた。とれた魚は魚市場へも卸されるが、漁の少ないときでも、必ず買い取って売り捌いてくれるから、網元にとってはこの行商の女衆は大事な存在なのである。

何人いたのかよくわからないが、近所にバチャの仲間が一人いた。大柄で元気のいい人だったが、交通事故で亡くなってしまった。声を出して売り歩くのではなく、お得意さんを回るだけで終ってしまうらしい。また、お客さんも新鮮な魚を当てにして待っている家も多かったようだ。ここでもお得意様の信用に支えられてきた。なんといっても、体が丈夫でないとできない商売である。



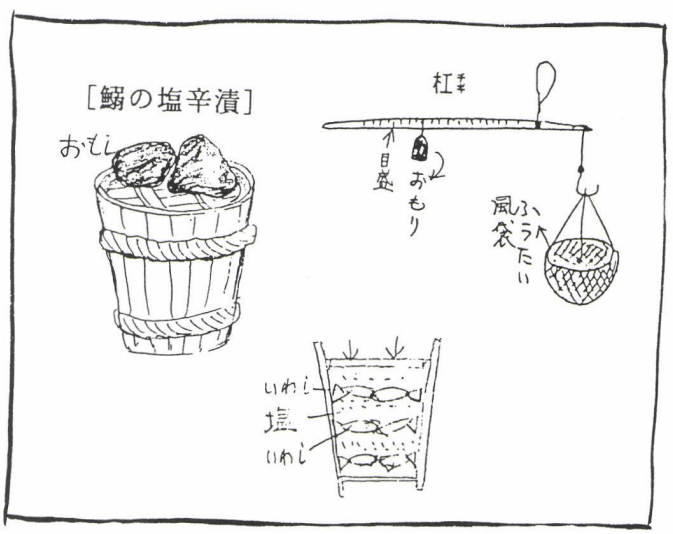
リヤカーで「流し網」漁の鰯売り

地引網のほかに四、五月頃になると、出雲崎などから「流し網」漁船団がやってくる。直江津港を基地に、佐渡沖で鰯漁をしてドックに水揚げする。これは量的に多いので、ほとんどが魚市場に出されるが、その一部をリヤカーで売り歩くのである。近所にはこの漁師たちを泊める船宿が何軒かあった。離れを持っている家とか、広い家で二階が空いているとか、そういった家に船単位で漁師が数人泊まり込むのである。

古城の子供達は、休みの日は「鰯もぎ」といって陸揚げされた網の目から、鰯を取り外す仕事を手伝うのである。朝五時起きして手伝うのだが、今でいうアルバイトであろうか。報酬は金でなく、鰯の分け前を貰ってくる。それでも、みんな嫌がらずに手伝っていた。これは慣れないとできない仕事で、網の目に頭がくい込んだ鰯を上手に外すのは難しかった。面倒くさがって、頭を切ってしまうと、売り物にならなくなる。大体、子供たちがもらってくる分け前は頭の切れた鰯が多かった。それでも、家に帰ってすぐに七輪の炭火で焼き、油の乗った新鮮で焼き立ての鰯に大根おろしを付けて醤油をジューッと掛けて食べるときの味はまた格別である。この時節はどこの家も鰯の焼く匂いがしていた。残りは摺り身にして味噌汁に入れたり、煮付けたりする。

バチャの特技は「鰯のショッカラ漬け」と「フグの調理」

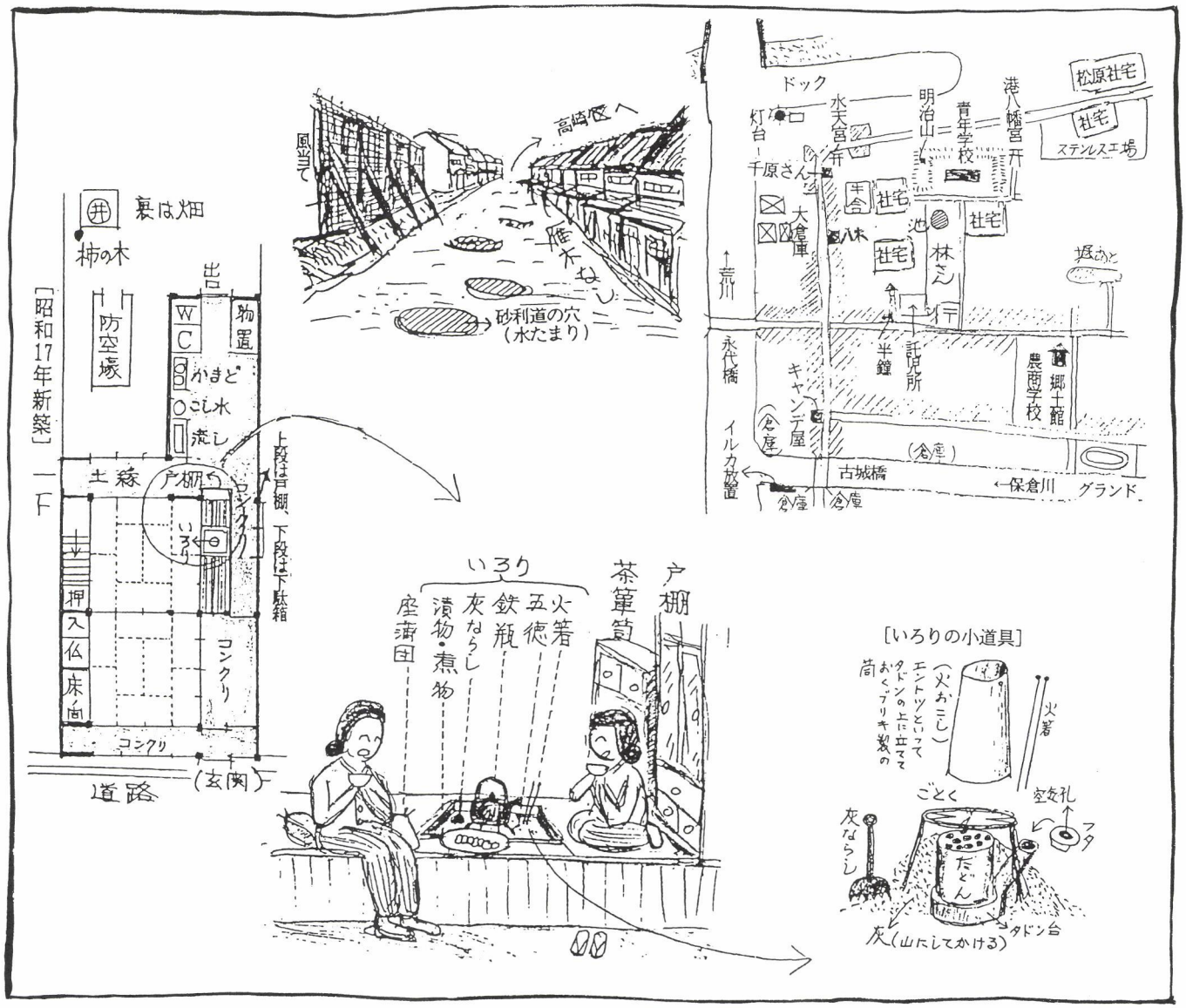
この大量にとれる鰯も時期があるので、これを「ショッカラ（塩辛）」にして冬までとっておく。頭を取り腹出しした鰯を樽に並べ、塩を振っては、積み重ねていく。樽が一杯になると、蓋をして重石を載せて涼しい所に冬まで寝かせておく。冬の魚の獲れない時期にこれを食べるのである。いわゆる保存食品だ。身が赤くなって、ぺったんこに押しつぶされているが、これがまたうんまい。正月のごっつぉ（御馳走）であった。塩が足らないと「口がかゆい」という味になる。そうかといって、ショッパ過ぎてもうまくない。この塩加減が難しいのだが、その点バチャは「ショッカラ漬け」の名人だった。名人と言えば、もうひとつある。それは、フグを料理することだ。直江津あたりで獲れるふぐは、五、六センチ程度の大きさであるが、いつも網にかかってくる。売れる魚ではないので貰ってきては家で食べる。どんなに小さいフグでも、皮を剥いで腹を出し料理した。味噌汁に入れるといいだしが出る。煮付けにしてもいいが、身がしまっていて、小骨がなく、肉離れもいい。一般的にはフグは毒があると敬遠されているが、バチャの秘密調理だった。さんざ（沢山）フグを喰ったが、しびれたことは一度もなかった。地引網ならではの新鮮な魚の味である。いい味といえば何といってもカマスの塩焼きと、渡り蟹の味噌汁が最高である。この地引網をしていた高崎の浜もいまは、港湾の海底となり消えてしまった。



こんなまちがあった

国道の西側にも家並があった

古城区は広かったので一区から四区まであり、私の家は一区だった（当時の直江津町の町名は区名が付いていた）。昔は家の前の直江津―柿崎線が国道八号線で、今の佐渡汽船駐車場辺りまで両側に民家が並んでいた。ただし、私の家の前側だけは家はなく、小さい土手になっていた。そのため、西風が強く当てたので毎年秋になると風当てをしていた。しかし、ドック添いの家は区画整理で移転となり、一部は私の家の前、今の信金あたりの場所に東西に並べて建てた。更に道路拡張計画で今度は西側全部が春日新田に移転となり、東側の家は後ろに下がった。その頃の道路は砂利道で大小多数の穴が開き雨の日は泥水が跳ね、石ころが飛び大変だった。従って、外の戸は腰高の板戸が多かった。



家の中に表から裏まで通り抜けの通路があった

この頃の家は表から裏まで通り抜けできる通路があって、これを「庭」と呼んでいた。今の家のように玄関で靴を脱いで家の中に入るという建て方ではなかった。勿論そういう形式の家もあったが、旦那さまの家か料理屋さんくらいで、普通の家は大抵この形式だった。そして、通路の横に居間があって、上がり口に必ず囲炉裏があった。囲炉裏には田舎に見られる自在カギこそなかったが、冬は練炭が埋めてあり、夏はボエ（小さな薪）を燃やすとお湯がすぐ間に合うようになっていた。側には戸棚と茶箪笥があり、茶道具と茶菓子、漬け物の類が常時入っていて、近所の人が来たときや、仕事の合間でも、土足のままで、上がり口に腰掛けてお茶を飲むことができる仕組みになっていた。また、家族がお茶を飲むときもここに集まった。囲炉裏はまさに会合の場であり、団らんの場であった。しかし、流しやトイレに行くときは、いちいち下駄を履かないければ行けないという不便さもあった。下駄が離れている所にあるときには、裸足で降りてよく叱られた。子供が大勢いると、下駄や靴が沢山あり乱雑になるので、朝と夕方には下駄片付けと「庭」の掃除があった。それは一番小さい子の役目になっていたので、私は万年「下駄片付けと庭掃除」の役回りをしていた。

家の裏に広い空き地があったが、それを挟んで南北両側にステンレスの社宅があった。お宮へ行く道を通っていくと右側にもステンレスの社宅があった。そして、高崎へ行く途

中の旧国道八号線の右側にも沢山並んでいた。さらに行くと道路の左側に松原社宅というのがあった。高い松の木が茂っていて、遠くからも松林がよく見えたものだ。四区の方へ行くと、信越化学や日曹の社宅が並んでいた。

こうした工場の社宅とは別に、直江津駅前の東側には鉄道官舎というのがあった。ここには集中して建っていたので、一つの町ができていた。当時は国有鉄道だったので官舎と呼んでいたが、官舎も社宅も今のように高層アパートではなく、たいがい木造平家建の二軒続きの建物だった。直江津は鉄道のまち、重工業のまちを象徴するかのように、官舎や社宅が沢山あった。

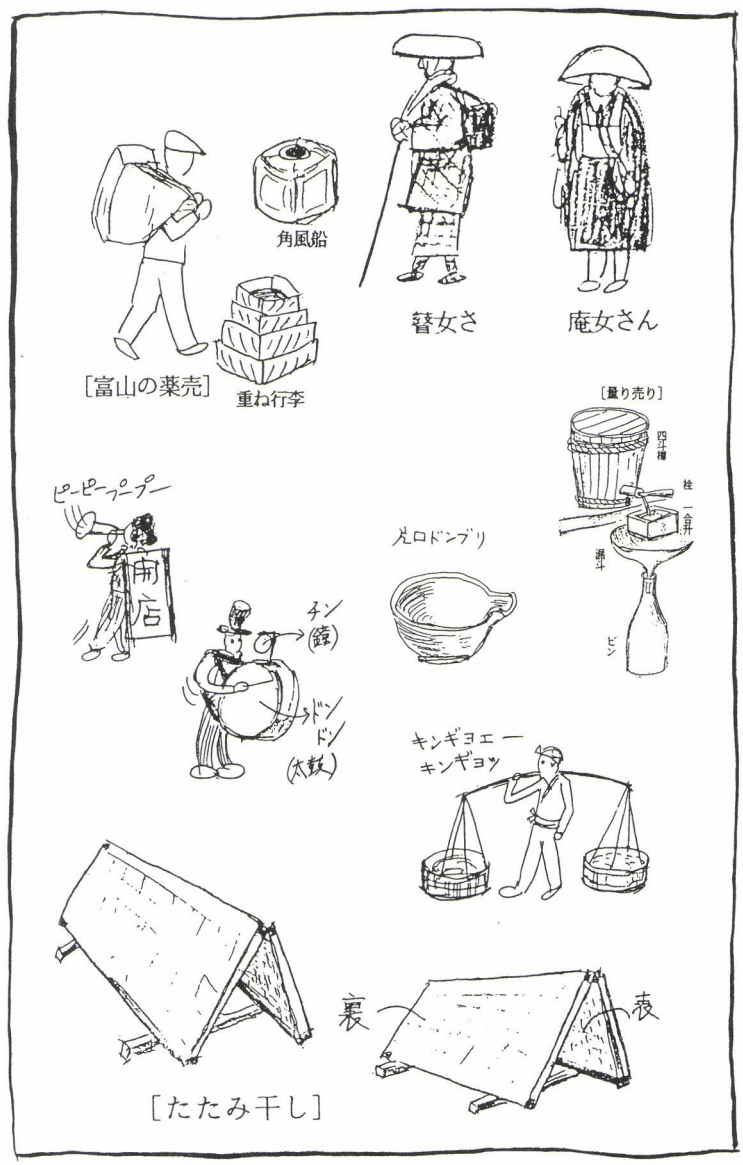
まちには専門店が沢山あった

子供の頃、よく遣いにやらされたものだが、一区から二区の古城橋までの間にある店屋さんを拾い出してみよう。北の方からいくと、靴屋さん、建築屋さん、カリント屋さん、八百屋さん二軒、たばこ屋さん、魚屋さん、たどん屋さん、自動車屋さん、醤油屋さん、鉄工所さん、荒物屋さん（塩専売所）、なんか屋さん（一文店のことで、子供たちの夢が埋まっていた）、畳屋さん、鉄工所さん、糀屋さん、風呂屋さん、呉服屋さん、酒屋さん、粉屋さん、菓子店さん、薬屋さん、床屋さん、クリーニング店さん、酒店さん、豆腐屋さん、時計店さん、自転車屋さん、（アイス）キャンディー屋さん、電気屋さん、呉服屋さん。お医者さんと肉屋さんはなかったように思う。歯医者さんは荒川橋の西袂の土肥歯医者さんによく通った。肉は新町のいろは肉屋さんまでいった。

一町内にこんなに沢山の店屋さんがあったのである。

昔は、酒や醤油はビンを持っていって量り売りで買って来た。四斗樽の栓をゆるめて一旦枡に受けてからジョウゴでビンに入れる。枡に受けるときに大雑把に溢れさせて入れる人と、ちょっきりと量って入れる人がいた。塩はザルを持って買いに行くが、金属製の目方秤で量って、紙を敷いて入れてくれた。

カレーのときは、「ダッチンやるすけ行ってこい」と言われて、橋を渡って直江津まで肉を買いに行かなければならなかった。肉は大概こま切れだったが、ヘギを三枚折りにして紐で巻いて包んでくれた。



醤油と言えば、料理中に足らなくなったときなど、よく「隣へ行って醤油借りてきてくれや」と片口丼をあづけられた。「おっかん、醤油貸してくんない」せって行くと、「こぼすなや」と言って貸してくれた。返すときに、作った煮物を持って行って、バチャは礼を言いながら、お茶を飲んでくる。こうした貸し借りは日常茶飯事で誰も気にしていなかった。一種の近所付き合いの手段になっていたのかもしれない。

のどかだった物売りの声やまちの音

子供の頃は、いろんな声や音が聞こえてきたもんだ。まず早朝のまちに「みょうがの子めすかー」と澄んだ女性の声が響きわたって

くる。縄か蔓かわからないが、紐で編んだ網状の袋をしょって「みょうが」売りが廻ってきた。朝露に濡れた取りたてのみょうがは新鮮なものだった。舗装されていない道路は朝早い内は車が通らないのでまだ埃がたたない。しっとりとした早朝の「みょうが売り」は風情があった。最近知ったのであるが、今はダム公園で有名な正善寺の集落は「みょうが」の産地で、そこの御先祖は平家の一族で京言葉が残っているという。「めすかー」というのも、「召すかー」と言う上品な言葉なのだと聞いた。

正午になると、「ポー」（サイレン）と鳴る。午後になると「金魚エー、キンギョー」と金魚屋さんの遠くまで通る声がした。三時頃になると「カチカチカチ」と紙芝居屋さんの拍子木の音、夕方になると「プープー」今度は豆腐屋さんの笛の音がしてくる。日が暮れてくると子供を家に呼び入れるおっかちゃ（母親）たちの子供の名を呼ぶカン高い声が聞こえてきて一日がおわった。

また、八月お盆の夜になると、盆踊りの太鼓の音が遠く近く、あちこちから聞こえてきた。近いところでは川原町の捕虜収容所の前の空き地で座がたった。

たまに廻ってくるものにチンドン屋さんがあった。「チンチンドンドン、チンドンドン」の音にくっついて一緒に歩いて廻ったものである。

富山の薬売りがまわってきた

富山の薬売りといえば全国的に有名だが、ちょっと具合が悪いときには、この置き薬が重宝した。当時はどこの家にも黄色い大封筒に入った薬袋がぶら下げてあった。頭痛に「ノーシン」、歯痛に「根治水」、切傷に「メンソリ」、化膿に貝に入った「蛸の吸出し」、また、蟯虫の絵が描いてある「セメン」もあった。楽しみにしていたのは帰りにくれていった角風船である。いま風船造りで有名になっている出雲崎町ではみな丸風船で、あの角風船はない。あれはやはり、富山の薬売りのトレードマークだったのかもしれない。

庵主（あんじょ）さんや瞽女さの姿がみられた

あんじょさん（尼僧）が「オーオー」と独特な節回しでお経を詠みながら玄関に立つ。「留守のときはお通りせえばいい」と言われたので、「おとーり」と言ったが、あんじょさんはお経を止めることなく、しばらく続けて詠んでいた。やがて終ると、何もあげなかったのに、お辞儀をして隣の家に移って行った。子供の頃は、よくその後にくっついて行った。同じく行脚する女性に「瞽女（ゴゼ）さ」（三味線を弾き唄って歩く盲目の女旅芸人）があった。門付けといって、家の前で瞽女唄をうたい「志」をいただいて廻るのであるが、これははっきりと覚えてはいないので、もしかするとバチャたちが話しているのを側で聞いていた記憶なのかもしれない。

四季折々の風物詩

初夏には「畳はたき」をした。畳を半日干して家に入れるときに、竹の棒で埃を叩くのである。あちこちからパンパンパンという音がしたもんだ。

昔の家はほとんどトタン葺きの屋根だったので夏の暑い時期になると、手拭をすっこ被りして屋根のコールタン塗りが始まる。トタンが焼けていて延びがよいのでこの時季にやったのだろう。照り返しが強くて、皮膚がただれるほどに焼けたものである。梅干しが天日に晒され、つまみ食いするのもこの頃だ。

冬が近づくと野沢菜や大根洗いが始まる。洗い水、すすぎ水と四斗樽を並べて洗い移す。洗った漬菜をリンゴ箱を台にした張り板の上に並べて水切りをする。これは手が冷たくて嫌だった。

年の暮れになると餅つきがあった。この餅搗きだけは、子供はかまどで火の番をするくらいだった。臼と杵は近所で持ち回りし、九日餅（苦んち餅）は悪いといって二十九日を避けた。朝早く起きて幾臼も搗くのだが、草もち、粉もちと搗いて、最後の餅は搗きたてを手でちぎっておろし、あんこ、きな粉餅にして食べた。のした餅が固くならないうちに今度は餅切りがある。

暮れのもうひとつの行事に大掃除があった。正月を迎えるために家中の掃除をするのである。神棚、仏壇の器物をクレンザーでみがくとピッカピカに光る。

■プロフィール
一九三二年上越市（直江津）生まれ。
高田中学校中退、電気通信省（現NTT）入省。一九八八年退職。長岡市在住。

●なおえつ信金倶楽部講演会＜抄録＞

「都市景観」から地域と歴史を考える

講師・浅倉有子



あさくら　ゆうこ
昭和59年お茶の水女子大学
大学院人間文化研究科修了
上越教育大学教育学部助教授

＊本稿は平成13年８月に行われた、なおえつ信金倶楽部総会での講演の抄録である。写真は編集部。

直江津地区の都市景観を素材として現在の町並みを歴史的な視点から考えていきたいと思います。また、都市に住む人々の生活についても、歴史資料をよりどころに考えてみたいと思います。

とはいえ、大学に着任して以来十年にも満たない新参者でございます。現在の町並みについてはよく分かりませんので、もっぱら歴史資料、江戸時代の資料によってそこから見えてくる町並みを素材としながら現在の町並みを考えるというふうにさせていただきたいと思います。

直江津の町家の構造と景観

江戸時代の直江津の町の宅地は、図1のように細長い短冊のような形で区画が行われていました。十七世紀末の直江津の様子を示すもので、当時中島町とよばれていました。

町の真ん中を通るメイン・ストリートの両側に、宅地、「屋敷地」といいますが、整然と並んでいます。メイン・ストリートに面した側が「表」で「間口」といいます。図中のひときは大きい「又兵衛」の宅地は間口が九間です。一間が約一・八メートルですから、一七メートルとなります。普通は三間から五間くらいですから、大変大きいことが分かります。それに対して「奥行き」、または「裏行き」が二十間ですから三十六メートル位でしょうか。間口に比べて奥行きが長いことがわかります。

幕末になると宅地の大きさはそのままでも、もつと細分化されて細かく家が建てられるようになりますが、現在でも間口が狭く奥行きが長い、一般に「うなぎの寝床」とよばれる町家のあり方は変わっていませんし、現在の町並みが江戸時代からの伝統をふまえてつくられていることが分かります。

直江津は江戸時代から何度も大火の被害を受けています。しかし、直江津の人々は、そういった大火に負けることなく、何度も町を復興させてきました。現在の直江津の町並みは、そういった苦難の歴史を乗り越えた成果でもあると言えます。

町家の間取り

図2は、直江津地区の川端町の町家の間取りを示した図面です。個々の町家の構造がよくわかります。

みの屋仙助さんの家をみましょう。表通りに面した部分が八畳の「店」で、この部分が商売のための空間になります。「店」に続いて「茶の間」があり、その奥の「座敷」は、床の間や仏壇を備えた非日常的な接客空間として利用されたり、寝室として用いられました。「店」・「茶の間」・「座敷」と一列に並ぶのが、典型的な町家の間取りです。

また、「店」から奥までを通り抜ける「庭（土間）」が見られます。渡辺六右衛門家や川合善吉家にも広い「庭（土間）」が設けられています。この広い土間は荷解きをしたりする商売のために必要だったのでしょう。

一方、みの屋仙助さんの隣りのささや惣八

家には、「店」に「二階拾弐（十二）畳」と記され、二階部分が設けられていることがわかります。二階部分については、屋根裏の物置または居住空間として利用される両方があります。二階部分には、土間から梯子をかけて昇りました。

住吉神社の石灯籠

写真は住吉町の住吉神社の手水鉢です。「寛政三年（一七九一）亥ノ六月　大坂　阿波藍染屋中」という文字が刻まれています。

染料の藍は、阿波徳島藩の特産物です。この手水鉢は、大坂と阿波の藍染業者により寄進されたものです。石灯籠も同じ社地内にあるものです。これも阿波の商人江島屋利助によって、安政二年（一八五五）に寄進されたものです。遠い阿波の商人たちが、なぜ直江津の神社に手水鉢や石灯籠を寄進したのでしょうか。

住吉神社は海上安全の神、航海の神として信仰された神様です。直江津には天明八年（一七八八）に創建されました。阿波の商人たちは、航海の安全を祈願して、手水鉢や石灯籠を寄進したと思われます。江戸時代の直江津は、日本海海運の重要な港湾の一つでもあったのです。

寄町の人々の職業

住吉神社がある寄町に住んでいた人々は、

図1

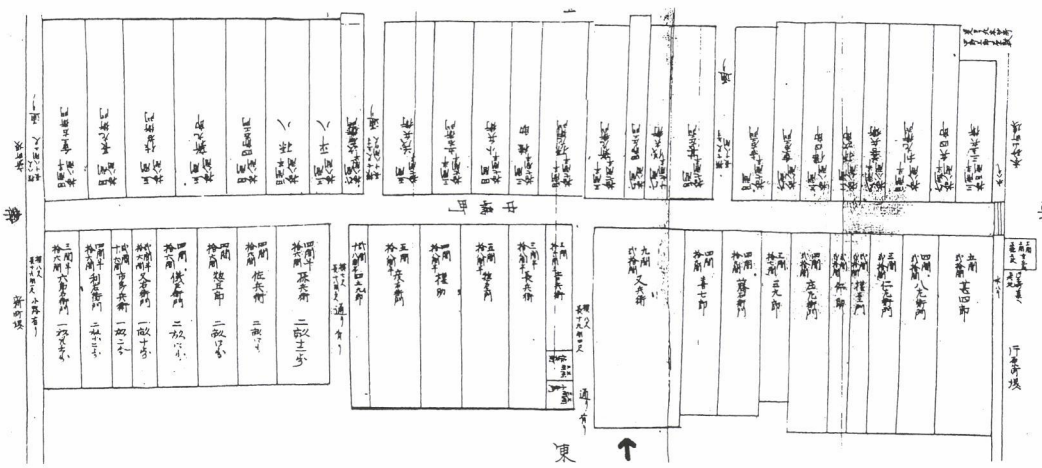
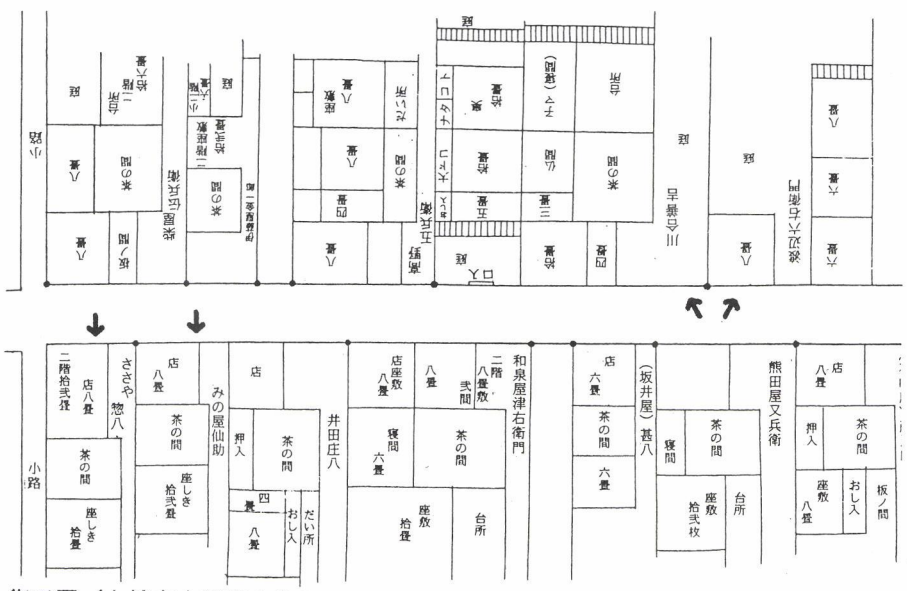


図2



福永家文書による原図・復元図／上越市史編纂室提供





住吉神社に奉納された石灯籠と手水鉢

どのような方法で生活の糧を得ていたのでしょうか。それをうかがうことができる「渡世向軒別書上帳」（福永家文書）と題された明治三年の資料があります。一軒ごとの職業が書き上げられている、他に例のない貴重なものです。

この資料によると、湊に出入りする船の荷物のあげおろしをする「小揚稼」が九〇軒、また、積荷の川下げなどに従事する「川船稼」が十一軒、この二つで寄町の七〇・六パーセントを占めます。

直江津は日本海海運の有数の港湾であり、また流通の拠点でもありました。寄町には、そのような直江津の特質に深く関わる人々が多数住む町であったのです。

なお、川端町の川嶋家は「廻船持」、柴山家は「廻船問屋」と記されています。廻船問屋は、廻船の積荷の売買の取次ぎや商品の保管などにあたる仕事で、またそういった廻船を所有したのが「廻船持」であると考えられます。川嶋家や柴山家も日本海海運に関わる生業を営んでいたのです。

新町の人々の職業

新町には天保五年（一八三四）から町会所が置かれていましたので、直江津の政治・経済の中心であったわけです。

もっとも多い職業が「日雇」で、日雇は江戸時代の都市部に多くみられる職業です。また「廻船持」「廻船問屋」など海運にかかわる職業、「質屋」「酒造（造り酒屋）」「旅籠屋」「町医者」「薬種屋」「飛脚」は他の町ではあまりみられない職業です。さらに「小間物屋」、綿織物などを扱う「太物屋」など消費材を扱う店、「菓子屋」「蕎麦屋」など、新町が政治・経済の中心の町であったことが、これらの職業からもうかがうことができます。

また、和算家小林百哺の私塾が置かれていました。百哺の家は髪結い業を営み、丁頭も勤めた家でした。百哺は、京都の土御門家に入門して、天文や算学、測量、暦法などを学びました。弟子は、直江津や高田近在のみならず、江戸や大坂にも及んでいて、門弟の数は、五〇〇人とも数千人ともいいます。百哺の塾が置かれていた新町は、文化の中心の町でもあったことがわかります。

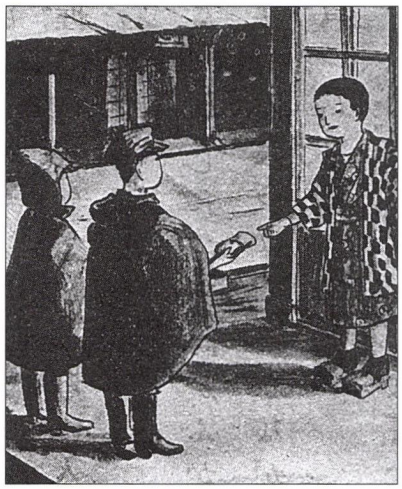
＊

＊

以上、直江津の町並みを歴史的な視点と歴史資料から考えてきました。江戸時代の直江津は、それぞれ独自の個性を持つ町々の集まりで、元気のあった町でもあったことが分かります。

（文責・編集部）

海西東陸



「高田読本」(3年生用)より
昭和12年刊行

昭和四十年に『越後くびき物語』(新潟大学高田分校郷土研究会編)という、頸城一円の歴史を子ども向けに書いた、なかなか読み応えのある本が出版されている。ほとんど入手できないのと、各執筆者名が分からないのは残念ではあるが、そのなかに「川渡りもち」という一節があって、なかなか興味深い考察が行われているので紹介したい。筆者は川渡りもちの伝承として次のようなものをあげている。

上杉謙信が川中島の合戦の前夜、アンコロモチを作って将兵に与えて腹ごしらえさせ、犀川を渡って大勝した。それを祝って春日山城下の家ごとにアンコロモチを作ったのが始まりだと伝えられている。一方、群馬県のある地方では、武田信玄が家来にモチを持たせたところ、川を渡るとき落としてしまい、ちょうど川下にいた上杉軍が拾って食べ、元気になって勝利したと言い伝えられ「カワビタリモチ」と呼ばれている。しかし、いずれにしても伝説を裏付ける資料があるわけではなく、永禄四年九月を今の暦に直してみても、「川渡りもち」の十二月一日とはほど遠い。また、夜明け前から搗くモチなので「彼誰(カワタレ)」が、「カワタリ」になったという説もあるが、これも根拠が希薄である。

続けて筆者は、

正月を太郎月と言うのに対して、十二月は末っ子、つまり「オトゴ・オトッコ」月であり、一日を「オトゴノツイタチ」と言い、その日に搗くモチを「オトゴノモチ」と言って、新年に向けてモチを川の神に捧げて体を清めたものと思われる。そこからカワヒタリ(川浸)、カワビタリのモチと言うようになったのではないか、と想像する。

このような風習は全国的にあったものであると、筆者は次のような分類し、

東日本 Kawa-hitari, Kawa-bitari, Ka-bitari
Kawa-hutari, Kawa-butari, Ka-butari
西日本 Kawa-watari, Ka-watari
Kawa-tori, Kawa-tobi

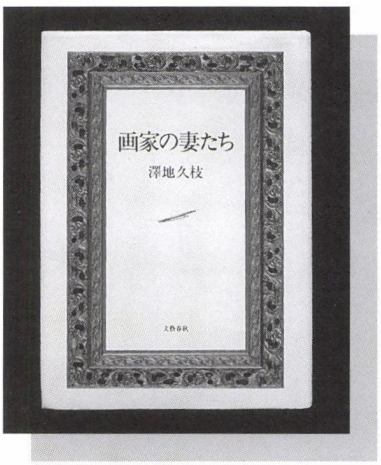
西頸城の山間地域でも古くから「カワフタリ」とか「カブタリ」という名前でこの風習が行われていたようなので、高田や直江津周辺でも当然行われていたと考えられる。寛保元年(一七四一)姫路から榊原家が入封すると、西日本の「カワワタリ」→「カワタリ」が使われるようになり、百三十年の榊原藩政のなかで定着していった(但し、榊原家は伊勢出身、三河→上州館林→白河→姫路→越後村上→姫路→高田と移動している)と推理し、それが明治になると幕藩体制から自由になり、新たに郷土の英雄上杉謙信公を敬愛する気持ちと結び付いたのではないか、と結んでいる。

しかし、筆者の「謙信説」は結論として少し説明不足ではないだろうか。かなりの飛躍を覚悟で言わせてもらえば、それは幕末に始まった皇国史観が、勤皇の心篤い上杉謙信を一躍時代の表舞台に押し出し、いろいろな伝承を一気に謙信公に結びつけたのではあるまいか。(こういうことの「事の起こり」は、意外に伝えられないものである)

ところで、直江津のごく一部で「源義経が奥州平泉へ落ちるとき(『義経記』に直江の津の華園観音堂、今の観音寺に泊まったとある)、直江の津の川岸の茶店で、モチを食べながら追っ手をやり過ごしたので、〝かわたりもち〟と言い、水難を逃れる」と密かに伝承されている(私の祖母もそう言っていた)。これは、わが直江津にとって、とても魅力的な伝承と言えないだろうか。もしご存じの方がおありだったら、お教えいただきたい。

(泊)

■読書びと



画家の妻たち

澤地久枝著

文藝春秋刊
（二四〇〇円）

敗戦記念日を挟んでマスコミは一斉に対米戦争とポツダム体制の〈検証〉にと狂奔する。毎年繰りかえされる茶番の構図に塗れながらこの夏も澤地は、熱く若者に語り続けた。

ミッドウェイの滄海から満州の曠野までのさまざまな死者の念いを背負って、今生きる人の目線から言葉を紡ぎ出してきた彼女が、自立した個の対極にある政党広報紙Aに、檄を寄せてまで死守せねばならぬ〈時代との絆〉とは何か。

澤地久枝は一九三〇年東京に生まれ四歳で渡満、十六歳の時敗戦と難民生活を体験する。四九年経理員として中央公論社に入社、勤務の傍ら早稲田の第二文学部を卒業し編輯者となる。六三年に、心臓手術、離婚、作家との醜聞を契機に退職。その後五味川純平と出会い、資料助手として十年間の修業時代により「昭和史の語りべたる人生」と、男の論理を自家薬籠中にした独特の文体を選択する。

一九七二年、その人のために起った天皇の激怒を買い叛徒として銃殺された青年将校達の、十四人の未亡人が辿った沈黙の三十余年を明らかにした『妻たちの二・二六事件』により作家として再出発。以後は「心に火をもち、情念の重く、不器用で骨っぽい一人の女が、忘れられた存在を書く人間としての仕事」を積み重ね、数十冊の結実を送り出してきた。

〈昭和〉を見送った澤地は、女という性に拘りつづけた年月から我が身を解き放つと宣言する。二年間沖縄に住いし琉球大学で日米関係史を聴講した彼女は、同時にこの国の政治と社会を撃つコラムを発信、七十歳を迎えた昨秋『私のかかげる小さな旗』（講談社）として長年の読者に手渡した。〈非武装中立〉に籠める澤地の夢想を、対にある性と睦みながら暮らす海辺の町で、私達は受けとる。

「あなたがどんな表情をするか、見ている楽しみがあるのよ。どんな感想を言うか、興味があるの。――向田邦子」というエピグラフに飾られた『画家の妻たち』は、処女作から二十年後の一九九三年に上梓された。

〈レンブラントとサスキア〉に始まり〈ワイエスとヘルガ〉に至る十九組の夫婦。巨匠の伴侶としてほとんど語られることのなかった妻たちの軌跡を踏査する。澤地は、画家がどんな暮らしの中で、魂を定着する現場に立ち続け得たのか、という素朴な疑問と関心を持つ。

全編に添えられた十九の肖像。その眼差しの先にモデルの妻を凝視する男のエゴイズムが渦巻き、ミレー、ルノアール、モディリアニなどのつらぬかれた愛のかたちが僥倖と思えるほどの、愛憎のドラマが綴られる。

花を描く夫のために野の花を採集し、夏の別荘の庭を育てた花で埋めつくしたカミーユ・ルドン。〈絶対の信頼と愛のしるし〉として六十歳の画家が妻を描いた「黄色い肩掛けのルドン夫人」には、結婚によって初めて彼が手にした天上の色彩が溢れる。

そして、唯一の例外として〈画家の妻〉にくわえられた青木繁の愛人福田たね、が「女の顔」と題されカンバスに遺されたのは、繁二十二歳、彼女が十九の歳である。

静謐の時に囲まれ物想いに沈む女と、激しい生の燃焼のただ中にいる娘の姿。人生の幸福の両極にあるこの二枚の肖像を（複製画で）細君と生活を始めた部屋に並べて掲げた私にとって、澤地久枝が思い育む〈絵とは何か〉に、こころ動くものが多い。

時局との消耗戦で、最前線に立ちつづける澤地の、その兵站地の秘密を垣間見せる一冊として、近刊の『琉球布紀行』（新潮社）と共に一読を薦めたい。

（晨）

読者から

仕事で故郷直江津をちょくちょく訪れる（帰る）機会が多く、その都度、まちが淋しくなって行くようでとても残念に思っておりました。

四月ころ仕事で寄ったとき、「直江の津」という雑誌を偶然手にする機会があり、その発刊の言葉の何処にも、いわゆる〝まちおこし〟とか〝活性化〟などという文言を使わず、直江津のことを何とかしようと言っていることに驚きました。

創刊号では至徳寺周辺のこと、幕末の直江津の町のこと、夏号では明治からの産業のこと、どれも興味深く読ませてもらいました。こんなことを言っては学校で教えていただいた先生にはすみませんが、執筆者が郷土史家の先生でないところがとても新鮮でした。また、水族館のことや妙高山のこと、場違い（失礼）と思えるようなブックレビューも興味津々でしたし、趣味の域？　を超えた研究論文や専門家の文化財の紹介も読み応えがありました。

夏号を手にした後で祇園祭の間に行く機会があり、お囃子の伝承のことが書かれていたことを思い出しました。関わっていない者がとやかく言うことは出来ませんが、まちの皆さんが伝承の仕方についていろいろ考えている様子が窺がえて、どこの土地へ行っても共通する話題を提供していると思いました。また、よく直江津のことを知っている人が巻頭のエッセイを書いていると思っていたら、杉さんという人は、高田に住んでいる有名な童話作家だということを子どもに教えられるという始末でした。

誠に勝手な希望ですが、僅かなページ数のなかでコラム風の軽い読み物もあったり、編集も大変だと思いますが、願わくばあまり高度で難しくならないようにお願いしたいものです。そして、最近は墓参りなどで故郷に帰っても泊まる家がないという人の話をよく聞きますので、ホテルのロビーなどに置いてもらえるといいかと思います。

学生時代、毎年七月になるときまって「祇園」に帰るか帰らないか話題にした世代ですが、昭和四十年代の高度経済成長のなかで故郷を捨てるように離れてしまった者にとって、残って家を守っている友人や、故郷で何がしかのことをしようとUターンした友人に、直江津について何も発言する権利を持っていません。しかし年齢と共に故郷のことが懐かしく思われるようになっていることも事実でした。今回「直江の津」を読んでいると、昔は良かった式のものは微塵もなく〝なにかしなければ〟という熱い心が伝わってくるような気がしました。

何も出来ませんが「直江の津」が続くかぎり、一読者として応援したいと思います。

本来なら名前を名乗るべきですが、仕事柄、誠にすみませんが匿名とさせていただきました。悪しからず。

（埼玉県在住）

投稿募集

「直江の津」では投稿をお待ちしています。

本誌の企画、執筆者への感想・意見・反論・身近な随想など、気軽にお寄せください。

フリースペースは、読者の研究論文・提言・意見発表・創作発表の場です。テーマは自由ですが、掲載について、編集部で多少の審査を行いますことをご了承ください。掲載文には僅かですがお礼をさし上げます。

投稿には、お名前・年齢・住所・電話番号を明記してください。フリースペース以外は匿名も可能ですが、その場合も氏名・住所をお書きください。

あて先　〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
北越出版内「直江の津」編集部
E-L hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

見る目

織部柳図徳利（おりべやなぎずとっくり）

織部という焼物は、安土桃山時代に製作が始められ、茶道具として現在も珍重されています。名の由来は、大名であり茶人としても知られる、古田織部が好んだ意匠で焼かせたことによります。撫肩でやや下膨れの胴に柳を対称に二本描いたこの徳利は、初期織部として全国的にも稀少とされています。ただ、焼物の好みは人さまざまです。徳利の評価は読者の皆さんにお任せしましょう。

今回は、地中から四百年の時を経て現代に甦った一個の焼物が私達に何を語りかけているのか、どのような地域の歴史を語ってくれているのかを考えてみることとします。

徳利は、春日山城に近い四ツ屋遺跡（現在の春日野一丁目）から出土しました。遺跡は春日山城の終末期に造営された館と考えられています。織部は、この他福島城から向付が出土したことが知られているのみです。発掘品は、出土した場所（空間）と製作年代（時間）とを組合せて歴史資料となり得るのです。そのいずれかが不明でも、歴史資料としては不適格ということになります。徳利の意義を探るため、福島城から織部が出土したという事実をキーワードとして考えてみます。

福島城は慶長三年（一五九八）、上杉景勝に替わって越前北ノ庄（福井市）から春日山城主となった堀氏が築城した城です。堀氏は慶長十二年に福島城が完成するまで、九年間は春日山城主でした。福島城は、慶長十九年の高田築城によって廃城となっていますから、築城が開始された年を慶長五年としても、城が短命である点で出土品の使用された時間を十数年に限定できるとても有効な遺跡です。

二点の織部は、春日野の四ツ屋遺跡と港町の福島城で空間的な位置が確定され、時間も堀氏が越後に入った慶長三年から高田城が築かれた慶長十九年までに限定できそうです。織部の歴史資料として位置付けがはっきりしてきました。このことから、織部徳利を上杉氏に替わって越後を治めた堀氏が、春日山城の防衛拠点として作った館の主に与えたもの、もしくは堀氏そのものが四ツ屋で使用したもの、福島城の向付は堀氏の所持品と推測できるのではないでしょうか。また、二点の織部は堀氏が同じ豊臣大名の古田織部を通じて入手したものであるかもしれません。

一個の焼物から、四ツ屋遺跡を春日山城の防衛拠点と推測するのは早計だと、そして堀氏の春日山在城時に新たな防衛拠点など整備する必然性はなかったとする反対意見も聞きます。しかし、黙して語らない発掘資料を生きた歴史資料とするには、徳利の出土した場所と時間から歴史資料として甦らせて多くの議論を喚起し、従来の古文書解読によって定説とされてきた地域史をより豊かなものとできると信じているのです。

■編集室から■

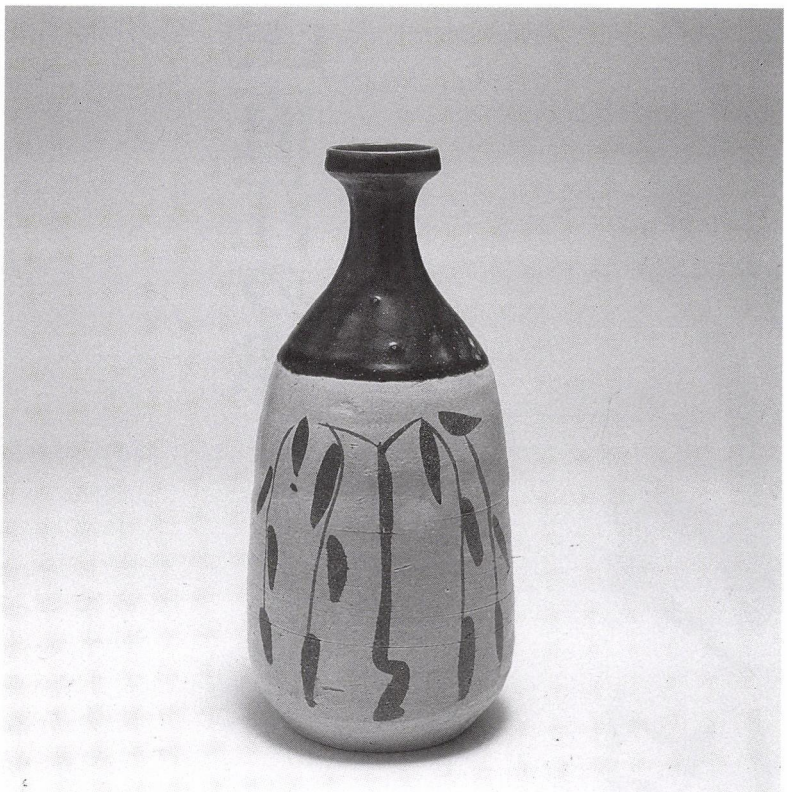
匿名の読者から心暖まる感想のお手紙をいただいた。本当にありがたい。

市川長野歴史館館長には、もうすこし先にお願いする予定だったが、上教大でのご講演を受けて急きょお書きいただいたものである。

最近、「歳取り」における東西日本の違い、「鮭鱒文化」などとよく言われるようになったが、市川館長の話によって、我々「東西日本の接点」に暮らす者が、あらゆることで東西文化を共有し、あるいは懸橋に立っていることが分かった。

ある人から、「たまたま大晦日の晩に、根っからの東京人の家に泊めてもらう機会があって、〈歳取りが無い〉ことにびっくりして、よほど貧しい家なんだと勘違いしたことがある」という話を聞いた。もうずいぶん昔のことであるが。

大悟法氏の話を読んで春日山に登ると、この平野が持つ自然の



■上越市指定文化財
種　別　織部柳図徳利
指　定　平成２年３月24日
管理者　上越市総合博物館
高さ　21.2㎝　腰の太さ　10㎝　口の径　４㎝





織部向付(破片)
高さ　2.5cm
上　内面　　下　外面

■小島幸雄（こじまゆきお）
上越市学芸員

然の意味がよくわかる。
余談になるが、春日山は大変よく整備されていて、遺構の説明板を読みながらゆっくり天守閣跡まで行くことができる。
浅倉氏の講演抄録は、創刊号特集の氏の論考と合わせてお読みいただければ、一段と興味が深まる。
フリースペースの八木氏の「こんなまちがあった」は、好評をいただければ「続」も考えている。
多くの読者の投稿をお待ちしています。
執筆者のご都合もあって、また発刊が遅れてしまいお詫びいたします。
訂正第二号28ページ、安政二年（一八八五年）とあるのは一八五五年の誤りでした。訂正します。

投稿・内容などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府二－九－五
☎〇二五五(四二)九七一五
FAX〇二五五(四二)二〇一五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

「直江の津」（季刊・第三号）
発行日／平成十三年九月二十日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市東町一－三
直振興業内
☎〇二五五(四五)〇二〇二
発行者／直江津信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

季刊

直江の津



発行／平成十三年九月二十日■発行所／直江津経済文化研究会■発行者／なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一六〇円)